

書評

前田英樹 著

『民俗と民藝』

講談社選書メチエ、2013年、245頁、1600円（＋税）

笠井 みぎわ

柳田國男（1875～1962）の民俗学と柳宗悦（1889～1961）の民藝運動に関しては、これまでも数多く論じられてきた。また、この両者を比較した研究もある。しかし両者の根底にある共通性を真っ向から論じたのは本書が初めてである。

著者の前田英樹は、これまでも言語学、身体技法、映像といった多岐にわたる研究を展開しており、その中で知性とは身体を通して初めて機能するものであり、身体が人間の行動の基盤であるという論を展開している。本書を表す前に、2008年に出版された『映像と身体—新しいアレンジメントに向けて』の中の前田の一文を上げておく。

「いくら知性が発達し、科学が進んでも、身体がなくなるわけではない。人間のすべての能力は、この身体に繋がってしか働かない。（中略）したがって、知性は知覚を補って、行動するためにあり、知性が発明する機械もまた、身体の行動を補うために作られる。このことは、西洋文明の発達のなかで、西洋人によってしばしば忘れられてきている」〔前田 2008：194-195〕。

前田は本書においても、身体がいかに思想の形成に反映するのか、また古来よりくり返されてきた動作が、日本という土壤に与えた影響がいかに無視できないものなのか、という観点から、工芸や民謡が連続された動作の成り立ちから培われてきたという論を展開している。本書の主題である柳田の民俗学と柳の民藝が根底では通じ合っていたという著者の考察には、こういった身体技法への造詣の深さと共に、西洋文明への著者自身の強い批判があると言えよう。

柳田が民俗学の研究を始めたのは、大正末期から昭和の初めにかけてであり、当時の日本は様々な民族・文化が共存した多文化社会であった。明

治の開国をきっかけに押し寄せる西洋文明を吸収しながらも、そこに疑問を覚えたことが、柳田と柳それぞれの出発点になった。柳田は既存の歴史学に、柳は美学にそれぞれ批判のまなざしをむけることで、新たな分野に目を留めるようになる。それが民俗学と民藝の始まりである。そしてその二つの思想の根底には、日本人が持続してきた「信仰にもとづいた暮らし」が存在する。それが「原理としての日本」[本書：4] であると著者は述べている。本書はその「原理」を探求しようと試みた著者の挑戦作である。

本書は「はじめに」と「あとがき」を除き、全16章からなっており、章ごとに柳田と柳双方の思想が交互に展開される。両者の独自性と共通性が浮き彫りになる仕組みになっている。本書の構成は以下の通りである。

はじめに

1. 失われた民謡
2. 農民から「常民」へ
3. 民俗学の対象、日々を生きる喜び
4. 工藝の発見
5. 暮らしの器
6. 木喰上人を求めて
7. 民藝運動というもの
8. 民俗学と民藝運動
9. 常民を想って
10. 南の島に在るもの
11. 魂が住む家
12. 粃種を携えて海を渡る
13. 穀霊の宿るところ
14. 生の工藝化としての「本能」
15. <民藝>を産む<民俗の記憶>

あとがき

前田が初めに着目したのは、柳田は伝承によって受け継がれる民謡（「ウタ」）に、柳は生活の中で生み出される民藝に注目したという点である。柳田が民謡に着目したのは、それが庶民によって口承で伝えられた歴史だからである。

民謡は、農村の生活のサイクルに組みこまれ伝承されていた。当時の歴史学は、文字が読める知識を持った人間から、次の世代の知識を持った人間へ向けられたものにすぎない。しかし、書物に書き残されていないところに庶民の歴史がある。民謡は文字を必要としない。文字がないために実体がない。しかし口伝えの伝承である限り、そこには農村の生活の中で庶民によって受け継がれてきた庶民の歴史がある。柳田の民俗学は、このような庶民史の視点から歴史の再構成を行った。その意味で、柳田の視線は常に過去に向かっていった。

一方、柳が着目したのは庶民の生活の中で生み出され、過去から受け継がれてきた道具の美である。その道具は雑器と呼ばれ、職人や農民たちの手によってつくられてきたものだった。柳が着目したのは、柳田が注目した伝承とは異なり、実体がある「もの」だった。それは今ここにあるもので、その「手仕事の美」をどのように未来へとつなげていくのが、柳の関心事だった。そのため、柳の視線は常に未来へと向かっていった。つまり、柳田の興味は過去に生まれ、消えつつあるものへ、柳の興味は過去と現在をつなぐことによって、未来に展開されていく工芸へと、別々の方角へ向かっていったのである。

しかし同時に、柳田と柳が生涯にわたって見つめたものは、庶民が営んだ暮らしの連続である。美は知識や書物の中に存在するのではなく、実生活の中で庶民が作り出し、直に触れられるものなのだという信念をこの二人は共有していた。

著者は柳田の民俗学を「記憶による学問」[本書：64]であるという。ここでいう記憶は西洋の機械文明を生み出した知性からなるものではない。機械文明を生み出した知性は、数量化を生み出し、工人の手技を無用化してしまう。一方、工人の手技は過去から現在へとくり返される動作の中で日々継承されてきた、文字を持たない記憶である。つまり、柳らの芸

術運動が見つめた「もの」としての民藝は、柳田の「記憶による学問」としての民俗学と密接に絡み合っているのだ。記憶と手仕事とは一つのものであり、この二人が見つめたものの根底には、等しく庶民の生活があるのである。

著者はそれを「原理としての日本」という。前田が述べる「原理としての日本」とは日本人が太古の昔より食していた米と、それに伴う稲作信仰を基盤とした生活文化である。

そうした日本の稲作信仰に基づく文化は、沖縄にその元型が残されていると柳田と柳も考えた。米を食することは、神と人とが共に食し、共に生活する「聖食」であり、「暮らしの中に信仰が息づく暮らし」である。しかし一方で、沖縄に目を向けた両者の取り組みにおいて、それぞれの思想の差異を明確にしていく。柳田は沖縄の風土・風習の中に一国民俗学としての「常民」の姿を見ようとした。柳田の思想の根本には「日本人はどこからきたのか」という問いが常にあった。そしてその＜日本＞という国の発生に、稲の伝来が起因するという思想を、柳田は独自に展開していく。やがて、柳田がみる沖縄の人々の源流には、稲作民の姿が映し出されるようになる。

それに対する一方の柳は、柳田とは異なる観点から、沖縄の町並みや、その地で織られる着物や、焼かれる陶磁器などの「もの」の美に着目する。柳はその町並みがあたかも朝鮮のようだと感嘆する。著者は、柳にとっての朝鮮と沖縄とは「正しい工藝」を産む原理がある場所だったと論じる。その二つには、受動性と慎ましい少数性があり、柳が関心をよせた「他力」に置く生き方が存在していた。著者は、柳が認めた「正しい工藝」には、柳田が『海南小記』（1925）で述べた「物の始めの形」が存在していたと主張する。そしてそれは「原理としての潜在的な日本」が沖縄にある」[本書：214] ということを意味すると論じる。

本書で第1章から14章にわたって交互に展開されてきた柳田と柳の思想は、第15章で両者の「古き日本」への探求によって重ね合わされ、本書の軸である「原理としての日本」という思想に連ねられていく。さて、この「原理」という言葉についてだが、強烈なインパクトを与えながらも、

安易なナショナリズムを想起させうる難しい表現である。前田は本書の冒頭で、こういった表現について、「はなはだ誤解を生みやすいことはよく承知している」[本書：4]と断っている。しかしその性質を十分に解しながらも、敢えてこの言葉を用いるところに、著者の強い主張が内在しているのではないだろうか。そこで最後に、著者にとってのこの言葉の意味を掘り下げること、「原理としての日本」が柳田と柳、双方に共通する思想であるのかについても考察していきたい。

本書の中で「原理としての日本」という言葉と共に、前田が繰り返し述べているのは、言語を超越した身体技法の重要性である。その身体技法とは、先に述べた「記憶による学問」を意味する。前田によると「記憶による学問」とは、文字を持たない歴史であり、「太古の昔より」受け継がれてきた「日本人の暮らしの連続」である。柳田が着目した「民謡」と柳が着目した「雑器」の二つの営みは、継承されてきた形式は異なるが、共に庶民の「暮らしの連続」の中で培われてきた。そしてその長い間に受け継がれてきた営みの中にこそ「原理としての日本」が存在するというのが前田の主張である。著者のこういった主張は、稲作信仰及び一国民俗学を評価する思想に裏打ちされている。

柳田は、『海南小記』からおおよそ40年後の1961年、最晩年の著作『海上の道』で、日本人の祖先は稲作農耕を携えながら、南から北へと移住の旅をし続けた民であったという論を展開し、多くの批判を受けることになる[赤坂2000：56]。しかし一方で、この著作は、柳田以前の民俗学においてはそれほど着目されてこなかった日本各地の地域性に注目を集めさせた。この点については柳田の大きな功績として評価されている。

前田によると、柳田の一国民俗学は、目の前にある事実を追求する学問であり、柳田は民俗学という学問の成立が日本人の暮らしの連続に基づくものであると信じていた。従って、柳田が稲作の起源を米の古代信仰に求めることは必然であったとしている。またさらに、稲作は日本人が太古の昔より受け継いできた「暮らしの信仰を導いてゆく原理」[本書：170]であり、柳田が稲作の起源を沖縄に求めたのは、沖縄には「現実の日本にはない」[本書：162]、ある種理想の日本の姿があったためだと前田は述べる。

しかし、柳田の民俗学の思想が、日本の原理を基盤に成立した学問かどうかについて疑問の余地が残る。前田は文字を持たない日本の歴史に着目した柳田の視点が「原理としての日本」の解明をきっかけに生じたものであり、文字化されていない歴史への視点が柳の思想と根本的に通じあっているとしている。しかし、実はこういった民俗学の手法は、柳田が独自に体得した手法ではなく、フランスの民族学者 A・ヴァン・ジュネップ（A・ファン・ヘネップ）（1873～1957）の影響によるところが大きい。柳田が稲作を中心とする一国民俗学を、「国民生活誌」として、日本国内の民俗事象の比較を進める以前に、ヴァン・ジュネップは現実の事実ばかりでなく、過去や未来の可能性を分析する方法として、いち早く言語学及び比較法に着目していた。こういった視点や方法は、柳田の民俗学と共通する点である〔伊藤 2002：78〕。また、ヴァン・ジュネップの他にも柳田が影響を受けた民俗学者にゴンム（1853～1923）や P・セビヨ（1846～1918）が挙げられる。

柳田研究で知られる伊藤幹治は、柳田が一国民俗学を創出するようになった背景には、ヨーロッパの民俗学を意欲的に吸収しようと試みたことがあり、その点についてナショナリズム思想と一国民俗学との行き詰まった議論を考察する上で、突破口の一つとして想起されるべきであるとしている〔伊藤 2002：137〕。

また一方、柳の民藝運動についてだが、柳は本書の中で前田が繰り返し述べているように、日本の民藝の特徴を明らかにしようとはした。しかし、それ以上に、アジア、ひいては世界の人々の暮らしに育まれた「手仕事」の美に注目していた。柳の「手仕事」に関する姿勢は、著者の意味する「原理としての日本」への探求とは必ずしも重なってはいない。柳宗悦の民藝運動に関して、前田が「世界の幸福に向けた取り組み」にその動機があると言ったのは興味深い。しかし、柳の思想の根本は、前田の述べる「原理としての日本」という思想に果たしてあてはまるのだろうか。確かに柳が民藝運動に邁進したきっかけになったものは、西洋文化の流入によって、消えゆく日本文化への危機感だった。しかし、柳が運動に携わる以前の 1919 年に、自身で出版した『宗教とその真理』の文中には次のような言

葉がある。

「野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである」[柳 1981：6]。

ここには「複合の美」という言葉がある。柳の思想には若い頃から西洋と東洋という二項対立があり、西洋への強い劣等感で悩まされていた時期があった。しかし、ロシアの革命家クロボトキン（1842～1921）の相互扶助的思想と出会い、次第に東洋及び日本の文化を評価する方向に変化していく。そしてそれを経て、それぞれの国の文化の真髄を究めることが重要であると思ひ至るようになる。柳宗悦研究で知られる中見真理によれば、柳は世界を単一なものにすることを平和とはせず、それぞれに異なる人種や民族が各々の美を育むことを奨励していたという。それを称して柳は「複合の美」と呼んでいた。多くの人は「民芸の柳」というイメージに柳をおしとどめたままにしているが、実は民芸をこえた柳の活動は大変活発だった[中見 2013：ii－iii]。

柳は日本統治下の朝鮮において、朝鮮の人々に対しては武器を持って立ち上がり、血を流すのではなく、自分たちの文化を磨き、底上げをすることで、個人個人の精神の自由を尊ぶよう呼びかけていた。その柳の姿勢からは、やはり「複合の美」の思想が浮かび上がる。その思想とはつまり、著者が述べる日本のみにこだわりを見せた柳の姿ではなく、より広い視野を持って国境を越えた「手仕事の美」に目を向けた柳の思想である。柳の視点は、日本を起点にしながらも、その思想は外へのつながりを求めて拡大していった。前田が述べる「原理としての日本」が内側へ向かっていくのとは、対照的な動きである。

本書は、柳宗悦の民藝運動と柳田國男の民俗学の根底には、共通する日本へのまなざしがあるとして、両者を比較し論じた点は評価できよう。前田のこの試みは、既存の民俗学及び民藝研究が光をあててこなかった点である。柳田と柳、両者の仕事をとおして、身体を介して作り出され、伝えられる文化を再考するための視点が提示されているところに、本書の意義があると言えよう。

しかし一方で、前田が「原理としての日本」という言葉を軸にして両者

の思想の根底に共通するものを探求しようと試みているが、柳田の民俗学及び柳の手仕事への姿勢とこの言葉の持つ意味とは必ずしも重ならない。柳田と柳の思想を通じて、「原理としての日本」を柳田と柳双方の思想の根底にあるものとして表象するにはさらなる議論が必要であろう。

参考文献

赤坂 憲雄

2000『東西／南北考—いくつもの日本へ—』岩波新書

伊藤 幹治

2002『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店

竹中 均

1999『柳宗悦・民藝・社会理論—カルチュラル・スタディーズの試み』明石書店

中見 真理

2013『柳宗悦—「複合の美」の思想』岩波新書 岩波書店

濱田 琢司

2007『あたらしい教科書 11 民芸』ブチグラパブリッシング

ブランド、キム

2007「民芸の発見—一九二〇年代の階層と趣味」バーバラ・佐藤（編）『日常生活の誕生—戦間期日本の文化変容』柏書房 pp.146-96

前田 英樹

2008『映像と身体—新しいアレンジメントに向けて』せりか書房

前田 英樹

2009『独学の精神』ちくま新書 筑摩書房

前田 英樹

2010『日本人の信仰心』筑摩書房

柳田 国男

1990『柳田国男全集 18』ちくま文庫 筑摩書房

柳田 国男

1997『柳田国男全集 第二十一巻』筑摩書房

柳 宗悦

1981『柳宗悦全集著作篇第二巻』筑摩書房